

第 64 回 岩手県特別支援教育研究大会 久慈地区大会

参加校

岩手県立盛岡青松支援学校 岩手県立みたけ支援学校 岩手県立みたけ支援学校奥中山校
岩手県立花巻清風支援学校 岩手県立前沢明峰支援学校 岩手県立一関清明支援学校
岩手県立気仙光陵支援学校 岩手県立釜石祥雲支援学校 岩手県立宮古恵風支援学校
岩手大学教育学部附属特別支援学校 三愛学舎

参加分科会

第 4 分科会（中学校での特別支援学級【自閉症・情緒障がい】における支援）

1 個に応じた配慮・支援の充実について

- (1) 障がいに合わせた環境の整備：職員の共通理解と統一した支援から心理的安全性を確保
- (2) 生徒の特性・性格の理解：日常会話から分析、感情の理解と表出、自己選択の徹底
- (3) 生徒の意欲を引き出す：社会との関わりを広げることで本人の許容範囲が拡大

成果：本人・保護者のニーズへの柔軟な対処による意欲促進、自己選択・自己決定の徹底による自己効力感の増加、情報共有を行い保護者との信頼関係を築く

2 小学校から中学校への円滑な移行への取り組み

早期支援の取り組みが充実した学校生活へつながるといふ仮説の実践（年間の取り組み）

- (1) 親子での授業参観・説明 (2) 職員の授業参観 (3) 職員と小学校担任との情報交換 (4) 特支入学説明会と支援級生徒との交流会 (5) 職員と本人・保護者の相談会 (6) 入学に向けての確認 (7) 年度初めの対応と連絡帳の活用

成果：保護者・本人の安心感の獲得、早期からの情報収集、教育支援計画等の早期作成

課題：対応職員の負担増・可能な支援の限度

第 5 分科会（特別支援学級【肢体不自由】における支援）

1 授業提供

- (1) VTR 視聴：特別支援学級（肢体不自由）自立活動

単元名「宿泊研修に参加しよう」 洋野町立大野中学校

自立活動の「2 心理的な安定」「5 身体の動き」「6 コミュニケーション」を関連させ、単元を構成していた。本時では、ホテルの朝食会場での具体的な場面を想定して必要な対策を考え、自分ですることと援助を依頼することを自分で決めることを目標に学習活動（行動訓練）を行った。生徒は振り返りの中で「自分で難しいときは、頼ることも大事だと思った」と感想を発表した。

- (2) 話題提供

岩泉町立小川小学校

「児童の実態に応じた支援のかたち～保護者と専門家と共に～」

1 年次、2 年次の支援の紹介と成果と課題を発表した。児童の実態に応じた支援は、日々の観察・記録と対話から生まれ、校内・保護者・専門家の連携が大切であるとの実践事例であった。

第8分科会（LD等通級教室における支援）

1 インクルーシブ教育とは全ての子供の教育を受ける権利を保障すること

- (1) 学校に通う子供たちは多様であるということが前提
- (2) 「多様な子供」とは、障がいの有無に関係なく、性的マイノリティの子供、外国にルーツのある子供、ヤングケアラーの子供など、支援が必要な子どもを含む

2 これから考えなければならないこと

- (1) 学校施設は、多様な子供が在籍することが前提となった施設やカリキュラムになっているか
- (2) 性的マイノリティの子供がいることを踏まえた活動がなされているか
- (3) 学校行事は、多様な家族がいることが前提になっているか

3 子供の学ぶ権利を平等に保障しているか

- (1) いわゆる「主流」の子供中心の学校は、そうではない子供にとっては公正な場とはいえない
- (2) 多様な属性の子供たちが考慮されている学校になっているか
→先生は、コミュニケーション・社会性・想像力を発揮して、子供達の背景を考える
- (3) 共感的・肯定的で、寛容な先生方がいる学校は、不登校がいなくなる
- (4) 当たり前のことが評価されないと、精一杯の子がしんどくなる

第9分科会（特別支援学校における支援）

1 特別支援学校における支援（高等部）授業提供

- (1) 作業工程の見える化によって仲間意識を高める。
- (2) 売上・作成量・お客様アンケートを生徒自身が確認し、主体的に取り組む意識を醸成する。
- (3) 作業の仕上がりを言語化することで、作業への意識を高める。
- (4) 自己評価と他者評価を通じた課題の把握と改善へとつなげる。

2 特別支援学校における支援（高等部）話題提供

- (1) 魅力ある学びの場づくりについて
 - ① 夢を語ることから始める（目指す生徒の姿・目指す地域の姿、魅力ある学校の姿とは）
 - ② 3年間で身に付けたい力の明確化（働くことの意義や価値が実感できる）
 - ③ 今ある作業班の現状分析とブラッシュアップ
- (2) 教育活動設定の際の重点
 - ① “本物の経験”により学び、使える力を養う。
 - ② 授業では地域をフィールドにし、社会貢献への理解と意識を深める。
 - ③ 地域の産業と結びつき、地域と学校がWinWinの関係をめざす。
 - ④ 必然性のある豊かな学びをめざす→「作品」ではなく、「製品」という意識をもつ。
 - ⑤ 生徒の自己理解を促すよう働きかける。

第10分科会（高等学校における支援）

1 話題提供「種市高校における通級指導について」

- (1) **通級指導の概要**…1年次は全員でソーシャルスキルトレーニング、2年次以降対象生徒に実施
- (2) **成果と課題**…インターンシップに向けた指導を軸に対応
指導内容、カリキュラムが個別対応で負担が大きい。
保護者から、特別支援学級や補習授業をしているイメージの問い合わせが多い。

2 話題提供「高等学校における校内支援の充実」（指導助言の中で）

- (1) **手立て**…「校内委員会の再点検」、「多層的な支援システムの第1層支援の充実」
- (2) **成果**…校内委員会を中心とした組織的な対応の促進
教職員が個々に行っていた全ての生徒への支援に当たる取組の全体での共有

講演会「インクルーシブ教育を考える」

- 1 S S T→「主流」と言われる社会に障害がある人が合わせる方法となっているが、それで良いのか疑問に感じている。
- 2 自立の意味を考える→「自分を尊厳ある人」と認め、認められ、支援を受けながら生きること。在学中においては、自立活動で学ぶ必要がある。
- 3 「主流（ここでいう定型発達児）」の子どもを中心として作られた教育は、そうでない子どもにとっては公正でない。主流とならない子供たちが、現在の日本の教育では排除されていることが正当化されている可能性がある。
- 4 特別支援教育はマイノリティに視点を当てた教育としてこれからの時代には必要。
- 5 合理的「配慮」→個別の状況に応じて行われる配慮とあるが、「特別扱い」という意味合いが強い。合理的「調整」の方が合っている。
- 6 教育においては、その子どもは「何ができるのか」という視点をもって授業づくりに取り組むことが必要。その子どもが自分で「何とかできるように」環境を修正することも必要。

第 63 回 東北特別支援教育大会 山形大会

参加校

岩手県立盛岡青松支援学校 岩手県立釜石祥雲支援学校 岩手県立宮古恵風支援学校

参加分科会

第 1 分科会 (特別支援学級 知的障害【小】)

1 生活の中で生きて働く知識・技能の獲得を目指した教科指導

(1) 図画工作：「お気に入りの「さえずりの森」をつくろう」→ 役割分担による協同的な作品づくり

① 実態の幅が広い 4 名の児童が、それぞれの役割をもって共同制作に取り組む実践

② 児童の得意なことを事前に把握、選択肢を複数用意→活動への主体的な参加

③ T1 と T2 が情報を共有しながら支援→児童の意欲を引き出す関わり

(2) 話題提供

① 国語：物語文の読み解き→「動作化(寸劇)」「絵」を用いて人物の気持ちを理解できるように工夫

② 一年を見通した自立活動の授業：複式学級を生かした取り組み→上級生が下級生に教える活動
「助けを求める力」を徹底して育成

(3) 多様な学びの場における指導・支援の充実とキャリア発達支援

-個別最適な学びと協働的な学びの一体化の実現に向けて-

① 「協同(同じ目的)」と「協働(補い合う)」→それぞれを単元のどの部分に組み込むかが重要

② 自律した学びを育む支援→「援助要請スキル」を育てることが大事

③ 振り返りでメタ認知を→教師「ここ頑張っていたよね」→価値づけをする

第 2 分科会 (自閉症・情緒障がい【中学校】)

1 動画視聴・説明「社会科 東北地方」

(1) **実践の概要**…生徒主体の調べ学習を目指した指導・支援の具体的な手立てを探る。

(2) **助言者より**…得意・苦手の把握、生徒がもつ抵抗感の背景を探ることの重要性

2 話題提供 1 「障がい特性に合わせた指導支援と見方・考え方が働く教科指導について」

(1) **実践の概要**…小集団での学習、教科の特性を踏まえた指導の共有、日常生活の重要性

(2) **助言者より**…「情報の共有」が大きなテーマ。個に合わせた指導・支援を可視化できている。

3 話題提供 2 「自己理解とコミュニケーションスキルを育むための中学校特別支援学級での取り組み」

(1) **実践の概要**…自分のことを見つめ直す活動、「p4c」を取り入れた話し合い活動、SST

(2) **助言者より**…凸凹の自分と向き合うための実践。自己肯定感を守り、導くことの重要性を感じる。

第 4 分科会 (通級による指導【LD等】)

1 話題提供 1 「一人一人の特性に応じた効果的な指導・支援を目指して～認知機能強化のための ICT 機器の活用例～」

(1) **実践内容**…点つなぎ (コグトレ)。指導用 PC の活用し、無料アプリをインストール

(2) **成果と課題**…ビジョントレーニングの要素を含むため、他の活動にも時間を費やせる。

2 話題提供 2 「対話を大切にした指導～子どもの興味・関心を生かして～」

(1) **実践内容**…通級時間割の固定 (生活リズムの確立)、興味関心のある題材 (車、石集め、パズル等)

(2) **成果と課題**…特別支援学級に在籍変更。毎日登校できている。保護者との関係も良好

3 話題提供 3 「読み書きに困難がある子の英語指導～認知処理様式に応じた指導実践の一例～」

(1) **実践内容**…大文字と小文字のマッチング、英文法の色分け、ルビの活用

(2) **成果と課題**…テストの正答率アップ、自らルビをふる等の様子、認知特性に応じた教材の重要性

第6分科会（キャリア教育【特別支援学校】）

1 キャリア教育全体計画の実践

- (1) 児童生徒に身に付けたい力を分類する。（ライフキャリアとワークキャリアの視点）
- (2) 各学部間のつながりに加えて、卒業後の進路先とのつながりを検討して計画を立案する。
- (3) 付けたい力が身に付くための指導・支援のポイントを学部で具体的に共有する。
- (4) キャリア教育全体計画の取り組み状況をアンケートにより把握し課題改善に向けた方策を検討。

2 職業準備性ピラミッドを基に学校としての指針を共通理解した保護者との連携

3 キャリア・パスポートの活用

- ①見通し②振り返り③自分の変容や成長を自己評価して、自己理解につなげていく。

岩手大学教育学部附属特別支援学校 第25回学校公開研究会

参加校

岩手県立みたけ支援学校 岩手県立みたけ支援学校奥中山校 岩手県立ひがし支援学校
岩手県立花巻清風支援学校 岩手県立一関清明支援学校 岩手県立気仙光陵支援学校
岩手県立釜石祥雲支援学校 岩手県立宮古恵風支援学校 岩手県立久慈拓陽支援学校

全体会

- 1 研究キーワード…児童生徒が「主体的に活動する姿」＝「自分の力を発揮して活動する姿」
- 2 研究目的…児童生徒が各教科等における見方・考え方を働かせ、主体的に活動する姿を目指した授業づくりの在り方を明らかにする。研究対象教科は国語、算数／数学。
- 3 研究内容
 - (1) 学習指導要領に示されている「教科等の枠組みを踏まえて育成を目指す資質・能力」から実態把握と目標設定、目標に準拠した評価を行い、授業づくりに生かしていく。
 - (2) 各教科等における見方・考え方を働かせる授業づくりの在り方について、児童生徒の変容と教師の変容から検証する。
- 4 研究の実際
 - (1) 既習状況や既習事項の確認、実態把握の仕方の相違、実施記録の必要性
→学習指導要領の目標・内容の一覧をベースにした実態把握が必要。
 - (2) 「実態把握シート」「指導案シート」を活用し、各教科等における見方・考え方を授業づくりへ反映させる。

参加分科会

小学部分科会

- 1 学部研究報告
 - (1) 「見方・考え方活用メモ」を使い、児童の姿を具体的に整理・共有し、授業を実践した。
 - (2) 児童が主体的に活動する姿を引き出すことができた。
- 2 公開指定授業 小学部3・4年算数「いろいろなものをくらべよう」
 - (1) 授業内では「ペットボトルの重さに着目する」という見方と、「2つのペットボトルの重さを比べる」という考え方を働かせる姿があった。
 - (2) 物を持ったときに、触り心地や温かさといった多様な感覚がある中の「重い・軽い」といった感覚であることを確認する働き掛けの工夫することが望ましい。

中学部分科会

- 1 学部研究報告
 - (1) 国語科における、見方・考え方＝言葉による見方・考え方
 - (2) 「研究メモ」により、有効な支援（手立てや工夫）を共有でき、見方・考え方を働かせる意識をプラスした授業づくりにつながった。
- 2 公開指定授業 中学部おもしろ3組国語「俳句」
 - (1) 見方・考え方整理したことで、教師の発問や声掛けが精選されていた。
 - (2) 生徒は言葉から読み取れる情報を整理することで、一人一人の読み取りや感じ方に差があり、違っても良いということを感じている姿がみられた。

高等部分科会

1 学部研究報告

- (1) 「見方・考え方」というのは、その教科ならではの物事を捉える視点や考え方のことである。
- (2) 教師が教科の本質を捉え、それを身に付けさせる教科の授業を、実態把握から評価までしっかり行うことが大事である。

2 公開指定授業 高等部トライ2組数学「大きな数の単位や数え方、比べ方を知ろう」

- (1) 導入ではスライドが使用しており、授業の見通しにつながっていた。
 - (2) ターゲットボッチャで、数を比較する授業で、数を作る際、表を用いて視覚的に整理できるように工夫されていた。

講演会「見方・考え方を働かせる授業づくり」

1 状況づくり（主体的・対話的な学び）

- (1) 児童生徒が楽しく学べる状況を作る
→興味関心を引く活動の設定、ストーリーやゲーム性を取り入れる

2 教科の目標（深い学び）

- (1) 教科の見方・考え方に着目させる→数学的・国語的な思考を働かせる
- (2) 具体的な活動を教科の学びに転化させる

3 両輪のバランスが重要

- (1) 楽しいだけの活動で終わらせない
- (2) 教師の意図が前に出すぎて児童生徒が飽きないようにする
- (3) 活動の中で自然に教科の見方・考え方を働かせられるようにする

第 54 回 肢体不自由教育実践教育研究協議会

参加校

岩手県立盛岡となん支援学校

1 これからの肢体不自由教育の展望

- (1) 初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について
- (2) 肢体不自由教育における授業力向上～深い学びの実装を考える～
障害の状態に応じ、学びの習得に必要な知的・運動プロセスを細かく分析することが重要。

2 授業づくりのL字型構造

各教科、場面での指導に一貫性をもたせるために、児童生徒一人ひとりの障がい（認知、環境、経験、姿勢、動作）のとらえを教員同士で共有することが重要。

3 遠隔教育支援システムによる特別支援学校のセンター的機能

通常学級に在籍する支援を必要とする児童生徒の増加により、センター的機能の重要性が高い。該当校への訪問に限らず Web 会議システムを併せて使用した持続可能で効果的な支援システム、特別支援学校での実践紹介や支援具の貸出によるサポートも有効。

4 障がいの重い子供の各教科の授業づくり

- (1) 各教科の見方・考え方のとらえ方
学習指導要領に示される理念・趣旨をもとに子供の実態に応じて教科の見方・考え方を具体化させる。
- (2) 確かな学力とは
物理的環境、人的環境、働きかけの工夫により、いつでも、どこでも、だれとでも活用できる知識・技能（横に広がる学び）の習得をめざす。

新潟大学附属特別支援学校 第47回特別支援教育研究会

参加校

岩手県立宮古恵風支援学校

1 研究主題「子供の確かな学びを育む授業づくり」

各教科等で育成を目指す資質・能力の着実な育成に向け、子供が教科等の内容に対する問いをもち、主体的に学習に取り組むことができる授業づくりをめざす。

2 公開授業：国語科Bグループ「きこう！つたえよう！～ふぞくのひみつ～」

- (1) 単元に生徒たちが関心のあるミステリー要素を取り入れ、自分たちの学校で噂される6つのひみつを解き明かしていくという内容が、生徒たちの学習への高いモチベーションにつながっていた。
- (2) タブレット端末と「ロイロノート」を使用していた。聞き取り活動のための動画を繰り返し聞いたり、見たい場面や再生速度を変えたりするなど、シンプルに操作できる教材であった。生徒がよりよい方法や自分に合った方法を考えて実践する様子が何度もみられ、ICT活用が主体的な学びの姿へつながっていた。

3 講演会：「知的障害のある児童生徒のための教科を通して育む資質・能力～思考へのアプローチ～」

国立特別支援教育研究所

- (1) 学習の好循環サイクルのスタートは、「問い」である。主体的な学びを、学習者を中心としたAARサイクル（見通し、行動、振り返り）に沿って積み重ねていく。
- (2) 子供たちに、考える「手立て」を伝え、子供たち自身が「考える」機会を意識して設定することで、手立てはより具体化され、確かな資質・能力を育むことにつながっていく。

第 42 回 障害児摂食指導講習会

参加校

岩手県立盛岡となん支援学校

1 摂食嚥下機能について

- (1) 口腔解剖・・・頬筋、口輪筋、オトガイ筋、舌骨上筋群、舌骨下筋群、咀嚼筋（側頭筋、咬筋）
- (2) 嚥下のメカニズム・・・捕食（前歯と口唇を閉じる）→咀嚼（口唇閉鎖をし口腔を隔離）→食塊形成（舌の中央部に食物を集め、舌を上顎に押しつけ保持する）→嚥下（舌尖を固定し、前方から口蓋に押しつけ、口腔内圧を高めて咽頭に送る）
- (3) 誤嚥
 - <原因>口腔内に食物を保持できず、咽頭に流れる、咽頭への送り込みと嚥下のタイミングが合わない、嚥下のスピード不足、不適切な食形態・姿勢、成長に伴う咽頭の長さの変化等
 - <防止策>
 - ① 姿勢・・・首は軽く前屈し、前頸部を緩める。重度の場合は体幹の角度を倒し気味にすると良い。
 - ② 食形態・・・水分にはとろみ。食塊を作りやすい粘り、まとまり。一回量を少なめに。
 - ③ 介助・・・リラックスできる環境や人。正面から食物を口の前方で捕食させ、口唇を閉じるよう支える。疲れると誤嚥しやすいため休憩を入れる。

2 摂食指導について

- (1) 食環境指導（心理的配慮、食事の雰囲気作り、摂食時の姿勢、食卓・椅子の選択、食具の選択）
- (2) 食内容指導（栄養、調理・再調理の方法、再調理器具の選択）
- (3) 摂食機能訓練
 - ① 間接訓練（口腔ケア、姿勢保持の配慮、脱感作、呼吸訓練、ガムラビング、バンゲード法）
 - ② 直接訓練（嚥下訓練、捕食訓練、咬断訓練、水分摂取訓練、自食訓練）

第 64 回 全日本特別支援教育研究連盟全国大会 北海道大会

参加校

岩手県立盛岡峰南高等支援学校

1 本人を中心とした関係機関との連携のあり方

(1) 学部間の連携

- ① 小学部からのキャリア教育（身辺自立、自己選択・自己決定、進路指導主事による進路学習、PTAの研究視察）
- ② 中高連携（作業学習の系統性、製品のコラボレーション）
- ③ 高等部での学習（失敗経験の積み重ね、ケース会議等による関係機関との顔つなぎ、勤労意欲の向上、できる状況づくりやナビゲーションブック作成等による自己理解）

(2) 関係機関との連携

- ① 適切な関係機関の選定
- ② 早期からの連携
- ③ 卒後支援の状況の情報共有による支援体制のアップデート
- ④ 企業等へのPRが不足しているため、PRする方法の工夫が必要

2 働き続ける力を育てる就労支援

(1) 学校在籍中の取り組み

- ① 何のために働くのか（中学部からの実習の積み重ね、社会人として身につけたい力の学習）
- ② コミュニケーション能力の育成（報連相、情報スキル能力）
- ③ 本人が描いている仕事に対するイメージと実際のギャップ（進路見学、先輩講話等による進路学習）
- ④ 本人、保護者の本当の気持ち（福祉的就労がダメではないこと、希望と現実のずれが長続きしない原因になることも）
- ⑤ 自己選択・自己決定（誰かが決めた進路は続かない）

(2) 卒業後の取り組み

- ① アフターケア（定期訪問・面談、一人一人に応じたサポート、様々な関係機関との連携、進路外勤と校内職員の卒後の様子の情報共有）
- ② 離職原因の追求（個人によって異なるのは当然だが学校としての離職率や業種の分析）
- ③ 一つの場所にこだわらない仕事場の見つけ方（卒業時はここ、でも他にもある、福祉的就労→一般就労、ステップアップを目指した転職）

第49回 日本肢体不自由教育研究大会

参加校

岩手県立盛岡となん支援学校

1 自立活動の指導の課題設定と評価

- (1) 自立活動の目標設定、実践、評価の根拠を明確にするためには、カード整理法が有効。
 - ① 児童生徒の実態を記入したカード
 - ② 実態のカードを集めた結果、見出しとなるカードの併用。
- (2) 評価の際に、児童生徒の実態を記入したカードが評価の観点となり得る。
- (3) 実際の指導の際は、理論と実践を往還させ、個に応じて修正して発展させていく。

2 指導の効果を高める姿勢づくり

- (1) 重度・重複障害のある児童生徒の姿勢を整えることは、教材に対して適切な視線を保ち、聴覚や視覚情報を最大限に活用することを可能にする。児童生徒が周囲の環境を把握して、自ら働きかけた結果を思考し、主体的に意思表示や試行することが重要。
- (2) ポジショニングのポイント
 - ① 車椅子座位
 - ・左右対称か
 - ・骨盤の傾きや捻じれの有無
 - ・座面のずれや硬さ
 - ・隙間の有無
 - ② 仰臥位
 - ・頭、頸部がまっすぐ向いているか
 - ・面で支えているか
 - ・本人にとって楽な姿勢
 - ・姿勢は崩れないが動くことができる姿勢
 - ③ 休息姿勢や活動姿勢など、目的ごとに良い姿勢は異なるため、多くの姿勢を取れることが重要。

第 59 回 全日本聾教育研究大会 長崎大会

参加校

岩手県立盛岡聴覚支援学校

1 記念講演 「聴覚障害児の可能性を極みまで信じて」 筑波技術大学

(1) 知覚と認知

- ① 知覚：それぞれの感覚についてその強さや質を区別すること
- ② 認知：知覚されたものが何であるか、判断したり解釈したりするプロセス（論理が必要）

聴覚障害児は、視覚世界のまま捉える。ことばは知覚したことを伝える手段となっている。よって、知覚はするが認知が苦手である。視覚面の支援のみならず、聴覚の刺激により、もっている能力をすべて引き出しきることができる。「聴覚障害児の眠っている（聞く）脳を呼び覚ます」こと、つまり、聴覚的な能力を刺激して時系列的処理能力を向上させることが大切。視覚優位にしない工夫が必要。

(2) 幼児期より認知のスイッチを入れる会話をすること

思考のスイッチを入れることば

因果、因果の可逆：どうして？/比較：どっち？/範疇化（帰納推論）：同じ？違う？/部分と全体：どれくらい？/具体と抽象：例えば？どういうこと？/統合（例：帰納推論）：だから？ということは？/仮説生成（例：演繹推論）条件一許可：…だったら、どうなるの？/道具一目的等：どうやって？
教師がモデルを示し、「多様なことばに子どもたちが出会える」ようにすることが大切。

2 授業研究分科会

(1) 幼稚部

テーマ 「みて、きいて、かんがえ、自分なりに表現し、伝え合いを楽しむ子」を目指した授業づくり
～授業実践を通じた手立ての改善～

- ① 絵日記は、ことばのすべてである。やり取りの材料が詰まっているので、積み重ねが大切。
- ② 遊びを子どもに任せてみる。その中で、必要なことばを投げかける。さらに、そのことばを違うことばと入れ替えて、本当に「分かる」につなげる。

(2) 小学部

テーマ 聴覚障害児の思考力・判断力・表現力等を向上させるための授業改善

～教科の見方・考え方を意識した授業づくりと子供同士が伝え合うことを通して学びを深めて いくための指導の在り方～

- ① 国語科の学びを深めるためには、文章の読み方のヒントを与える指導を行うことが重要。
- ② 児童の発言や児童同士のやり取りを促すために、コミュニケーションルールを確立させることは有効。確立したルールを次第に崩していくことで、臨機応変な対応ができるようになっていく。

3 研究協議分科会 教科指導（小学部）

テーマ 「対話を通して自分の考えを伝え合い、深め合う授業づくりとは」

「ことば（概念に結び付いた符丁）」と「コミュニケーションの意欲」が児童の学びにつながる。さらに自分の考えを深める＝自ら調べようと思う「意欲」をどのように育てるか。ICTの活用が有効な場面も多いが、実際の経験を通して身につけていく知識もある。児童の実態把握を丁寧に行うとともに、実態に合った学習方法や課題を与えることが必要。